

鉛をかじる虫

寺田寅彦

青空文庫

近頃鉄道大臣官房研究所を見学する機会を得て、始めてこの大きなインスチチュートの内部の様子をかなり詳しく知ることが出来た。名前だけ聞いたところではたいそういかめしいお役所のような気がして、書類の山の中で事務や手続きや規則の研究をしている所かと想像していたのであるが、事實はまるで反対で、それは立派な応用科学研究所であつて多数の実験室にはそれぞれ有名な学者が居て色々有益で興味のある研究をしているのであつた。

色々見せてもらったものの中で面白かつたもの一つは「鉛をかじる虫」であつた。低度の顕微鏡でのぞいてみると、ちよつとこくぞう穀象のような恰好をした鉛のような鼠色の昆虫である。これが

地下電線の被覆鉛管をかじって穴を明けるので、そこから湿気が侵入して絶縁が悪くなり送電の故障を起こすのだそうである。実に不都合な虫であるが、怒ってみたところで相手が虫では仕方がない。怒る代りに研究をして防禦法を講じる外はないであろう。

虫の口から何か特殊な液体でもだして鉛を化学的に侵蝕するの
かと思つたが、そうでなくて、やはり本当に「かじる」のだそう
である。その証拠にはその虫の糞ふんがやはり「鉛の糞」だといふ。
なるほど顕微鏡下にある糞の標本を見るとやはり立派な鉛色をし
ているようである。

これらの説明を聞いた時に不思議に思われたのは、鉛を食つて
鉛の糞をしたのでは、いわば米を食つて米の糞をするようなもの

で、いったいそれがこの虫のために何の足しになるかということである。米の中から栄養分を摂取して残余の不用なものを「米とは異なる糞」にして排泄するのならば意味は分かるが、この虫の場合は全く諒解に苦しむというより外はない。

『西遊記』の怪物孫悟空が刑罰のために銅や鉄のようなものばかり食わされたというお伽ときばなし話はあるが、動物が金属を主要な栄

養品として摂取するのははなはだ珍しいといわなければなるまい。もつとも、人間にでもきわめて微量な金属が非常に必要なものであるということ、近頃だんだんに分りかけて来ているようではあるが、しかしそれは食物全体に対してこのマイナス何乗というような微少な量である。この虫のように自分の体重の何倍もあ

る金属を食って、その何十プロセントを排泄するというのは全く不思議というより外はないであろう。

何のために鉛をかじるかが疑問である。送電線の被覆鉛管の内部にどんなものがはいつているか、そんなことを虫が知つていようとは思われないから、虫の目的はやはり鉛自身にあることは明白である。それなら単なる道楽かというに、虫が道楽をするというのも受取りにくい仮説である。何かしらこの虫の生存に必需的生理的要求のために本能的にかじると考える外はないように思われる。

こんな疑問を起こしているうちに、妙なことを聯想した。

われわれが小学校中学校高等学校を経て大学を卒業するまでの

永い年月の間に修得したはずの知識は、分量で測ることが出来る
とすれば、いぶん多量なものであろうと思われる。十七、八年の
間かじりつづけ、呑み込みつづけて来た知識のどれだけのプロセ
ントが自分の身の養いになっているかと考えてみても、これはち
よつと容易には分かりかねる六むかしい問題である。しかし、とも
かくも、学校で教わったことの少なくとも何十プロセントは綺麗に
忘れてしまっていて、例えば自分等の子供に質問されて即座に明
答を与えることが出来ない程度にまで意識の圏外に排泄してしま
っているのは事実であるらしい。

そんなに綺麗に忘れてしまうくらいならば始めから教わらなく
ても同じではないかという疑問が起こるとすれば、これは自分が

今この鉛を食う虫に対して抱いた疑問と少し似た所がある。

「知らない」と「忘れた」とは根本的にちがう。これはいうまでもないことである。しかしそれが全く同じであるとしても、忘れなかつた僅少なプロセントがその人にとってはもつとも必要な全部であるかもしれないのである。

世の中に工率百プロセントの器械は一つもない。注ぎ込んだエネルギーの一部は必ず無駄になつて消費される。電燈の場合などでも肝心の光になるエネルギーは消費される電力の割合にわずかな小部分で、あとはみんな不必要な熱となつて宇宙に放散する。この、物質界に行われる原理を、鉛を食う虫の場合の生理的現象に應用する訳には行かないし、いわんや人間の精神現象に持ち込

むべき所由はもとよりのない。それにもかかわらず「無駄を伴わない滓かすを出さない有益なものは一つもない」という言明は、どうも少なくとも一つの作業仮説として試みに使ってみてもいいように思われる。この仮説を許容するか、しないかで結果には非常な差を生じる。この仮説が真ならば、無駄をしないようにするには結局有益なことを一つもしないというより外はなくなる。また有益なことをするためには結局なるべく無駄を沢山にするようにしなければならぬということにもなるかもしれない。しかしこの仮説が誤りであつて「無駄のない有益なものが可能であり、それが当然である」とすると、無駄は罪悪でないまでも不当然であり不都合である。従つて、そういう咎とがめを受けないためには、結局やは

り何もしないで、じっとしているのがいいことになるのである。そうなればすべての活動は停止して冬眠の状態に陥ってしまうであろう。それならばまだまだ安全であるが、排泄物をなくするために食物を全廃すれば餓死するより外はない。

鉛をかじる虫も、人間が見ると能率ゼロのように見えても実はそうでなくて、虫の方で人間を笑っているかもしれない。人間が山から莫大な石塊を掘りだして、その中から微量な貴金属を採取して、残りのほとんど全質量を放棄しているのを見物して、現在の自分と同じようなことをいつているかもしれない。

こう考えてみると、道楽息子でもやはり学校へやった方がいいように思われ、分からないむずかしい本でも読んだ方がいいよう

であり、ろくでもない研究でも、しないよりはした方がいいようにも思われ、またこんな下らない随筆でも書かないよりは書いた方がいいようにも思われてくるのである。

（昭和八年一月『帝国大学新聞』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第二巻」岩波書店

1997（平成9）年1月9日発行

入力：Nana ohbe

校正：川向直樹

2004年8月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鉛をかじる虫

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>